

## 三村申吾青森県知事 講演会

日時 平成17年10月28日（金）

場所 岩手県庁12階 講堂

### ○司会

ただいまより三村青森県知事をお招きしてのリレートップセミナーを開会いたします。  
まず、竹内副知事から歓迎のごあいさつを申し上げます。

### ○竹内副知事

三村知事さんには大変お忙しい中、このリレートップセミナーの講師として岩手県にご来県いただきまして本当にありがとうございます。職員一同、心から感謝を申し上げます。

このリレートップセミナーは平成14年の第6回の北海道・北東北知事サミットで合意され、連携機運の一層の醸成を図るとともに、各道県の行政機関、職員の資質の向上、行政品質の向上に資そうということで取り組んできたものでございます。

こういうふうには各道県の知事さんが別の道県に行って講演をするという取組み、これは全国的に類を見ない取組みでございます。これは北東北と北海道の連携の大きな成果の一つでないかというふうに考えております。今年1月には、秋田県の寺田知事さんにご講演をいただきました。今回は、青森県の三村知事さんにご講演をいただきます。

三村知事さんは、平成4年から百石町長をなさいまして、平成12年から衆議院議員を歴任されております。平成15年の7月から青森県知事としてご活躍をなさっておられます。何うところによりますと、ご就任以来、例えば攻めの農林水産業の推進といったような大変戦略的なダイナミックなプログラムを掲げられまして、これも非常に先進的な取組みなのですが、農林水産部の中に公募による課員で構成される総合販売戦略課という課を設置なさっています。今日は、「生活創造社会～暮らしやすさのトップランナーを目指して～」というテーマでご講演をいただくことになっております。このご講演はテレビ中継で庁内、出先、各振興局に放映されておりますので、職員の皆さんも今日の講演を糧に一層業務に励んでいただければというふうに思っております。

岩手県と青森県は、ちょうど県境に十和田八幡平国立公園というすばらしい自然を持っておりまして、八戸と久慈地域、あるいは二戸地域、そのような地域間の交流が深かった地域でございます。そして、平成14年には東北新幹線八戸駅が開業いたしまして、現在、新青森駅への延長工事が着々と進められております。これからもいろいろな取組みを通じて、両県の交流と連携がさらに深まるものと考えております。

私ごとで恐縮なのですが、三村知事さんが百石町長時代に私も青森県職員として奉職していた時代がございまして、そのときからいろいろとご指導やご示唆をいただいております。現在でもご相談申し上げたりもしております。この場をおかりしまして、改めて厚く御礼を申し上げます。

最後に、今日のセミナーが今後の両地域及び北海道・北東北地域のさらなる連携に向けて実り多いものになるようお祈り申し上げて、三村知事さんに対する歓迎のごあいさつとさせていただきます。今日はありがとうございます。

## ○司会

ご講演の前に、テレビで視聴している職員に連絡します。

本日のご講演で使用されるパワーポイントの資料は「ノーツ掲示板の通知等（必読）、三村青森県知事によるリレートップセミナーについて」に追加情報として掲載してありますので、そちらを参照されながらご視聴をお願いします。

それでは、本日は「生活創造社会～暮らしやすさのトップランナーを目指して～」というテーマで、三村青森県知事様からご講演をいただきます。よろしくお願い申し上げます。

## 講 演

### ○三村青森県知事

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介をいただいたわけですが、青森県知事の三村申吾と申します。

もう副知事さんの顔を拝見すると、本当にうれしい、懐かしい、ありがたいというか。私は以前百石町という小さな町の町長をしていたのですが、その場所は八戸と三沢の間にあります、十和田湖から出てくる奥入瀬川の出口の町でございまして、町長就任当時、今も青森県全体としてそうなのですが、道路の体系であるとか、河川の整備であるとか、いろんなことで県の課長の力をかりるといことは重要なわけがございます。

当時、竹内副知事さんは青森県の道路課長をしておりました。八戸から三沢に至る産業道路と言っている4車線の道路があって、日本ハムの主力工場が私の町等にございまして、非常に交通は盛んであるけれども、道路が非常に悪い状況でした。橋も昔の木橋でした。産業道路が途中で木の橋になるのです。それで我が町に入るといような、そういう意味では、のどかでいい町ではあるのですが、奥入瀬川の河口でございまして、そのぐらい風情があるのもいいのですが、さすがに当時、六ヶ所の開発もどんどん進んでいたわけですし、もう何度もこの道路問題について、もともと県管理の道路でございまして、県に相談しておりました。

あるとき電話がかかってきて、「補正で対応できる」と。それで、4車線の立派な橋がかかって、道路も4車線、どっと我が町をぶち抜いた。それが竹内副知事でございました。あっという間に6カ月で完成しまして、やるもんだ、大したもんだ、県の職員はと。よく聞いたら岩手県の人だと。

青森県の地形はご存じのとおり真ん中を挟んで八甲田山がございまして、雪が10メートル降る青森とか津軽、弘前側は除雪費用が大変です。一方、百石町では、私の町長時代に一番少ないときに除雪費用が年間200万でした。ものすごく寒いのですけれども、津軽平野に雪が落ちる、山を越えて来るのはもう空っ風だけということで、地形的にも風土的にも違う部分があって、現状でも津軽平野があり、南部の地域があり、その均衡ある発展ということに非常に常に心配り、心配りを非常に今でもしている部分があります。こうして今日、言葉が違うとは言いませんけれども、同じ南部の言葉が一番通じる岩手の方にお邪魔することができて、うれしく思っています。

そういうわけで朝から晩までよくそんなにしゃべっていると言われる知事として青森県のP

Rをし続けております。やっぱりしゃべるといふか、きちんとどうしても説明をしたくなる。説明をしたくなると、二つぐらいやればいいのに、どうしても五つぐらいやってしまうと、これが悪い癖なのですね。

私は元々が政治の世界というよりも、学校を出てから新潮社という出版社で本をつくっていました。編集者というの、書く方は無口な方が多いわけですから、取材を代行したり、あるいはいろいろ説明したりするときに、しゃべる癖がついてしまいました。私はこう見えても編集者時代に怒りやすい性格と言われていました。しかし最近は、しゃべることはしゃべるけれども、じっくりと人の話も聞き、いろんな意見を吸い上げて物事を進めると、そういうことをやれるようになったなど。三村もちゃんと大人になったものだとか冷やかされながら知事を努めております。

我々先日、白神山地で世界自然遺産会議というのを行ったのですけれども、今回岩手県も平泉、いよいよ世界文化遺産ということで、大いに期待するところでございます。何といたっても文化遺産、観光の方も来るようになりますし、やはりその土地に歴史ありと。我々の地域にやっぱり世界に誇る堂々たる歴史があるということを、この平泉文化が示していくわけでございますし、大いに期待するところでございます。

そして、私どもは、北海道も含めて4道県で縄文回廊事業ということでやっていますが、縄文の時代というのがあり、特にこの岩手を中心に日高見国があったわけでございますので、もう一つの日本があったと。我々にはやっぱり大和と違う日本の国の別世界をつくってきたという思いがあるわけでございまして、我々の縄文も何とか平泉、ずっと後になるかもしれませんが、今世界文化遺産について北海道も含めてともに目指すことができないのかなということ等を考えております。

今、4道県の交流ということで、私どもから岩手県に7名来ております。本当にかわいがっていただいてありがとうございます。岩手から青森に来ている方々もおりますが、非常にいい形で交流が行われていると思っております。

4道県、考えてみれば日本の国の中でお互いにそうリッチでもない、日本全体がプアなわけではないですけども、そうリッチでもない。しかしながら、意欲と心意気というのですか、案外まじめだと思います。県庁の職員、私はこれで自分のところも含めて4道県回る形になりますが、皆それぞれ目的を持ち、あすに向かって意欲を持ち、誠意というのですか、とことん、こつこつとまじめに働いていると感じる次第でございます。こういった公務員の方々がいるということ、このことがいわば北東北、そして北海道を含めての強みだと思っておりますし、この日本の国、地方の財政が苦しくなる状況があるわけですけども、皆様方が私は人財、人の財（たから）と申していますが、県庁職員が財（たから）であると。その皆様方がどんどんアイデアを出し、どんどん行動してくれる限り我々は大丈夫だと、北東北、北海道は大丈夫だと、そういう思いがあります。

さて、それではきょうは自分のところのプランということで恐縮ですけども、青森が今どんなことを考え、私知事のもとでどういう方向に向かっているのかということをお話していきたいと思っております。

生活創造社会ということ言う前に、お互いに借金の自慢をしてもしょうがないのですけれども、ともかく私就任のときには1兆2,000億借金がありました。経済というのは、金が回ってい

れば大丈夫。ただ、うちは1兆円弱は回せるけれども、回らないものが二千数百億あると、要するに埋没しているものがあると。したがって、知事就任のときには財政再建団体に落ちる、もう完全にそういう状況でございました。

そこで、まず何よりも就任してやらなければいけなかったことが、徹底した財政改革と、当然行政改革ということになるわけですが、日本一有効求人倍率が悪い状態、その状態が現在も続いていまして、したがって働く場、要するに就労の場がないということ、働く場がないということは未来にとって、少子高齢化の時代にとって、やはり子供たちに対して我々の責任であると。働く場をどうつくっていくか、要するに財政再建ということを進めながら雇用及び経済対策ということを行っていかなければならない。大変に矛盾した話なのですが、それを同時期に行っていくなければいけないというのが私の立場でございました。

ともあれ、かなりきつい財政改革のプラン、現状でも公共事業を3割削減しました。まあ、大変でした。それから、職員給与も今400億返してもらっておりますし、なおかつトータルで1,300名ちよい職員を、年次計画で定数を見直していくと。基本的に小さな県庁を目指していくという仕組みを今進めています。

そういったことを進めていく中で、自分なりの考えとして、青森県をどのように元気、再生していくかと、再生新生プランを示していくかということが重要なわけでございます。

そこで、青森県内に財政改革プラン、行政改革大綱、そしてもう一本、生活創造社会というものを我々の目標にしたいという考え方でございました。では、この生活創造社会とは何か。我々の地域は、暮らしの観点からいくと大変に暮らしやすい、過ごしやすい、そういうことが感じ取られていると思います。実はいろんなことを進めるに当たって、1万人のアンケート調査を行ったのですが、6割の方々が青森県は暮らしやすい、過ごしやすいということがデータとしても出てまいりました。

岩手もそうでございますが、四季折々明瞭、非常にくっきりと四季があり、食べ物、これ毎日地産地消、毎日スローフード、スローライフやっているような感覚なわけでございます。やはり我々食であるとか住環境であるとか、いわゆる通常の自分の身の回りの暮らしの部分においては、相当に本県の方々が満足度が高いという状況があるわけでございます。であれば、むしろ21世紀の価値として、物や金という20世紀、あるいは戦争の時代とも言われ、いさかいの時代とも言われた20世紀ではないと。もはや20世紀ではない。21世紀、価値は何だろう。暮らしやすさ、あるいは時間というものではないかと。要するに、自分自身が人生の中で持っている時間、そういうものをそれぞれが自助努力することでより豊かに過ごせる、その仕組みというものを我々が提案していくべきではないかと。生活創造社会とは、暮らしやすさではどこにも負けない、そういう地域づくりを目指すこと、また生活創造社会は自然のリズムや時間というものが大切にされ、その中で今まで見えなかった生活の価値、人生のすばらしさ、私たちの立場で言えば、青森で生きることのすばらしさなどが再発見できる地域、言いかえるならば自分流の豊かさを求めて、自分自身の持っている人生の時間の中で挑戦していく、その挑戦が可能な社会ということを目指していこうと、そう考えたのであります。

岩手においても「がんばらない宣言 いわて。」を初めとして、非常に北東北似たようなのがやっぱりあると思います。21世紀というものがスローライフ、スローフードという風潮が迫ってくる中では、そういったことが非常に重要ではないかと、そういうふう感じた次第でございます。

しかしながら、青森県の現状を考えますと、この生活創造社会というものを実現していくためには、暮らしやすさの支える基盤でありますところの産業、雇用、最も本県にとって問題でございます。そして健康。これはもう全然自慢できないのですけれども、全国一の短命県でございます。なぜ青森県かと。やっぱりいろいろ考えてもしょっぱいのを食べて、飲みたいだけ飲んで。ともかく健康の部分について、どういう施策を打つか。また安全安心、これは食の安全安心も含めていろいろあります。

そして、青森らしさをつくる二つの財産というものを大事にしていく施策をまた進めなければいけない。一つは、先ほど申し上げたとおり、あえて当て字を充てています。人こそ財（たから）であると。この青森でチャレンジしていく、そういう人財を育成していくことが我々にとって非常に大きな青森らしさがある。

環境は、岩手も言うまでもないですけれども、このすばらしい環境の中で潤沢な水資源、使える水資源というものを保持しながら、農林水産業も行われているわけですし、我々の命そのものもいい環境の中で、適切な環境の中で生きていけるというわけでございますから、この三つの基盤と二つの財産、これを確固たるものにして財政改革を推進しながら、選択して集中的に投資できるところには投資してこの五つのもを確立する、その目標の先にあるものは生活創造社会です。施策ばらばらというのではなくて、一つの目標を掲げて具体の重要案件は何かということで絵をかいて皆様方にお示ししたわけであります。

我が県は5年間10本のプロジェクトで県庁を徹底全力投球しています。自分が政策的に使える金幾らあると思いますか。竹内さん、幾らだと思いますか。

#### ○竹内副知事

200億ぐらい。

#### ○三村青森県知事

20億です。それだけ財政再建のために投資しているわけで、20億でやりくりをしながらやりたいこと、生活創造社会を実現するための10本のプロジェクトを実施しています。わくわく10。1番、自立する人づくり推進プロジェクト。2番、しごと空間創造プロジェクト。3番、攻めの農林水産業総合販売戦略プロジェクト。4番、あおりツーリズム創造プロジェクト。5番、あおり型産業創造育成プロジェクト。6番、健康といのちのはぐみ推進プロジェクト。7番、あおり循環型社会創造プロジェクト。8番、美しいふるさとの水循環推進プロジェクト。9番、地域安全防災推進プロジェクト。10番、ユビキタス、これは坂村健さんと一緒にやっているのですけれども、ミューチップつくっている工場もありますから。10番、ユビキタスあおり推進プロジェクト。この10本に徹底的に投入していこうと。10本のプロジェクトをとことん進めていきながら、先ほどの三つの基盤、この二つの財産を確立していこうとしています。

本県では7,000億弱の財源がある。岩手県は、さらにそれより多い財源がある。これをどう切り回していくかというのが皆様方お一人お一人のまさに人財、人の財（たから）としての公務員の仕事でございますよ。絶対この日本は地方公務員が、国家公務員のことを悪く言うつもりはありませんけれども、現場を預かっている我々がその問題点に気づいてどんどん改めていく、そういう状況に入ってきているわけです。霞が関に座っていたって、結局わからないわけですし、何

も見えないですよ。皆さんは見える。本当に見える。市町村の今は何が問題かもよく見える。現場にべったり過ぎると見えないことでも県という立場にいると見える。この見えることをどう岩手県をよくするために生かすか、青森県をよくするために発言し、提案し、生かすか、これが問われることだと思っております。

まず攻めの農林水産業のことについて言いたいと思っています。本県は、日本有数の食糧県であります。自給率 115%、全国 4 位ですが、魚 300 とか果樹 300 とか、カロリーベースですから 100 になるのですけれども、リンゴとかニンニク、長芋、ヒラメとか、非常にいいもので高く売れるものがある。なぜもっと高く売らなかったか。

きょうは増田知事さんのところに弘前ふじというリンゴを届けたのですけれども、銀座千疋屋で今 1 個 3,000 円。この間まで中国市場で 2,000 円で売っていたのが世界で一番高いリンゴだったのですけれども、私らもそういう取引が行われると思わなかったのですが、確かに品質はいいのですけれども、3,000 円が出ました。通常は 1,500 円とかそのぐらいで取引銀座あたりではしているらしいのです。中身を割るとジューシー、適正着果運動という、木にいっぱいリンゴならせない、ほどほどの数でやることによって甘くなる、おいしくなる、ツル割れ、褐変という障害が起きない、品質がよくなると、そういうことなのです。ともあれ我々は、北東北全部が、有数の食糧供給県であります。そこで、攻めの農林水産業、こんなにいいもの、おいしいもの、安全、安心なものをつくっているのに利益幅が少ないことから、もうちょっと流通まで我々参画して、そしてまた売り方の仕組みを変えることによって利幅をとる仕組みを考えています。その中に雇用というものを 1.5 次加工とか 2 次加工とかということも含めて奨励していますから、農工連携で。新しい雇用も確保していこうと、売って売って売りまくることが、「攻めの農林水産業推進プロジェクト」ということになっています。そうしたところ、知事がこうですから、のりのいい連中が寄ってくるというか、総合販売戦略課公募で集めると、36 名採りますところを 105 名ぐらい応募がありました。この総合販売戦略課長が「知事、社是をつくりました」と報告に来ました。そして朝しゃべっているのです。「笑顔は商いの基本なり」、「農産、海産、景勝地、売れる商品見つけます」、「一日二物三顧の礼でお買い上げ、県民の利益が我らの願い」と。この気持ちで本気でみんなで取り組んでおります。これまで農林水産部はつくるだけ、商工労働部は売るセクション、観光は観光で別セクション、本県のいろんなものを PR していく、売っていく部分はばらばらなのです。それをやっぱり一体化しようと、青森県のいいものを共に売っていこうということで商工セクション、観光セクション、農林水産セクションを一つにしましてつくったのがこの総合販売戦略課です。あちこちセールスががんがん回って歩いていまして、いろんな新しいブランド品、シャモロックという鳥など非常にこれは勝負できるという品種や、いろいろな青森の新しい産物、あるいは今までであったけれども、実は自分たちだけで食べていたものなどを今国内外でがんがんセールスをやっております。また、三県共同でやっている大阪のジェンゴ、このジェンゴにおいてはいつも外の販売では岩手県さんが常にトップなのですけれども、今年は青森県も岩手県さんを抜きつ差しつつ、みんなががんばっております。また、これまでは大阪の「なんば花月」には秋田の「あきたこまち」が入っていました。「あきたこまち」って名前がいい、評判いい。しかし、なんば花月で人気が出まして、青森産米を取り扱うようになりました。向こうが言うにはカツどんとかカレーライスに青森の米ぴったりだと。なんば花月で秋田県産と米が

代わったので、秋田県には本当に申しわけないと思っているのですけれども、営業というのは隙があったらお互いにやるということで、お互いに切磋琢磨、これ大事でございます。総合販売戦略課、どこへでも、何でも売りまくりに行ってございまして、これはおもしろい取組みだと思っています。

天職を得たという者がいるわけです。公務員を長くやっているでしょう。まじめにただ座って、こうやってパソコンを朝から晩まで見ている、それでは仕事にならないですよ、本来。どうしても外を歩いて物を売って歩きたい、そういう連中が水を得た魚、水を得た大間のマグロという感じでばんばん、全国に売って歩くのです。

そして「あおりツーリズム」これは三県共同で実際はやっているわけですが、「あおりツーリズム」という戦略を今展開しています。本県風光明媚な十和田湖や八甲田連峰など自然環境と、安心な農林水産物がある、三内丸山を初めとした歴史風土ある。いろんな観光資源恵まれているわけでございます。

恐山もあるし、すごいですよ、ジョン・レノンでもマリリン・モンローでも津軽弁でおろせる恐山。これは岩手も秋田も一緒でございますが、本県が有する、この北東北が有する安心安全な農林水産物や多彩な自然資源に満ちた美しい空間、そしてゆったりと流れる豊かな時間を訪問者とともに全身で満喫してもらい、そういう新しい形の観光でございます。

日本テレビがやっている「ダッシュ村」というのがあるのですけれども、私たちは「あおり達人村」というバーチャルビレッジを開村いたしました。長期滞在する方、若い農業研修生など、いろんな方々が現実に来ております。これはお互いに観光テーマとすべきですね、あの団塊の世代の年金と退職金をどうやって北東北がゲットするか、これ大きな課題ですよ。あれを東京とか、ハワイだとかにやる必要ない。田舎体験ができて、暮らせるような仕組みをつくったのです。実際の農業体験もできるような仕組みをつくったのです。もともと岩手県境の名川町は、グリーン・ツーリズムがものすごい盛んな場所でございます。果樹の里、いわゆる山紫水明といったら本当にここだと自分自身も思っていたんですが、そこで町長さん方とお話をして、やるなら思い切っている方々が来て長期滞在するような仕組みにしましょうよということで現実に始まりました。そして始めたら、パソナの南部社長さんがえらいおもしろいことやっているなど、これから21世紀間違いなく農業の時代だし、農業技術を持っている人間を育成する、そのことも大事だろうと。おお、そうだと、一緒にやりましょうということで農業研修生を10名ばかり受けています。農業食糧生産に重要なのは、水と土と人ですね。この人の部分に我々は非常に大きな問題を抱えています。担い手です。篤農家の子弟であればあるほど学校に入って都会に出て行って帰ってこないという方が岩手でも多いと思います。そういう状況なわけですから、人の部分でパソナがこういうことに乗り出したというのは非常に驚いているのですけれども、今連携をしています。次は「海彦山彦食の幸活用モデル事業」。青森の西海岸はご存じのように夕日が沈むときにジュッと音がしたというぐらいの……。本当に。そのぐらいの場所なのですけれども、いい食べ物があるとは一々言うまでもなく、山の幸、海の幸があるわけですが、自分たちはお客さんが来たときに、客が来たからきょうは豚カツ食わせなければならぬか、ステーキ食わせねばならぬかと今まで思ってやっていたそうです。違うぞと、みんな食べたいと思っているのは、ここ白神山地のふもとですから、地元のものだと。

地産地消、漁家レストラン、農家レストランなど食べられる仕組みをつくっておく。そうすると、やっぱりかなりの方々がそこへとどまって食べる、泊まってくれるというような形になっています。白神山地、世界自然遺産というのがプラスの分があって、そこでみんなとどまってくれます。

平泉、この間平泉で一関の料理いただきましたけれども、あれもすばらしいものですね、現地の地産地消の最たるもの、お酒もおいしかったですし、こういう形で東北、我々の地域が農家レストラン、漁家レストラン含めてフランスやドイツのグリーン・ツーリズム、ああいう形を実現できる。私は北東北は大変な可能性があると思っています。こういう形で「あおりツーリズム」というものを進めています。

そしてまた、「青森観光サーベイ推進事業」ということを進めております。

職員のアイデアで、地図の旺文社と組んで、青森県の観光ガイドブックを発売しました。これが、ベストセラー、増刷も決定しています。内容は、我々の調査員が、自らの足で歩いて撮影した写真を掲載して、全て○△□で評価して、改善して欲しい点などをはっきり書いています。書かれた方のそれに対するメッセージも載せています。これも県庁職員のアイデアです。給料のもらっている分は一緒にがんばろう。できれば職員のアイデアを出してくれと。アイデアを出したら、それを活かそうと言うことなのです。

本当に先ほどから話しているのですけれども、最大の人財であります職員の能力とか意欲というものをどのようにして盛り上げていくかというのが実は自分自身仕事であると、一番大切な仕事であると思っています。県民の皆様方にいろんな説明したいことも重要でありますけれども

どこでもそうですけれども、岩手県もそうだと思いますが、県庁には最も優れた人財が集まっていますので、その活躍ができる仕組みをどうつくるかが重要です。私どもでは、提案者事業実施制度、「庁内ベンチャー」と言っているのですが、職員それぞれがチームつくって、部門も何も関係なしで、チームをつくって提案をしてもらいます。その提案がよければ企画立案した職員に対して権限、財源を与えて自分でやってみると、そして徹底して支援する。2年間で一定の成果を出せよということを知事就任以来提案してやってもらっています。これまで6件の事業を採択しました。例えば橋梁のアセットマネジメントとあって橋のメンテナンス、この間国交省にもプレゼンテーションして、大阪の国際大会でも発表して、来年ポルトガルの学会でも発表しますが、県内の全部の橋の点検をする。そうすると、今まで無計画にさびたから直すとかなんてやっていると50年間で2,000億かかる。しかし、計画的に調べることによって、その耐用年数を延ばす、順番を選んでメンテナンスしていく。アセットマネジメントで、経費を圧縮できて、使用年数を延ばせると、そういう仕組みを提案した職員がいました

また、「まるごと青森情報発信事業」というものについて若干説明したいと思います。

これもチーム5人で提案したのですけれども、「私たちこのままの青森ではいけないと思うのです」と、「何でいけないのだ」と、「青森がもっと発信すべきです」と、「何を発信するのだ」と、「いいところとか、おいしいものとか、とにかくどんどんPRしなければだめだ」と思います。自分たちが体張ってどんどん青森をPRします。でも、自分たちの活動はあくまでも忍者部隊、覆面部隊として、潜水艦部隊としてやらせてください」というようなことを提案してきたチームが

ありました。最初は、大丈夫かと思いましたが、でも、意欲満々で、とにかく任せてくださいということだったものですから、ではやらせてやろうということにしました。

青森の情報が最近、TBSの「はなまるマーケット」やみのもんたさんの番組に続けて放送されました。それ全部実は私どもの仕掛けでございます。

彼らは広告を打つのではなく、マスコミ、その他とネットワークをつくってテレビ番組で放送してもらったり、雑誌等で紹介でもらうという、そういうのはただネゴシエーションだけではできないわけでございます、ゲリラ的取り組みノウハウつくりました。したがって、その青森のいいものなどトータル108件、平均週2件青森の情報が流れているのですけれども、広告換算すると36億2,400万円、5名の人件費と事業費で6,700万、したがって36億2,400万となりますと投下資本利益率5,165%、すごい。とはいっても、大変に働いていました。自分たちが提案したから、自分たちが働いたというあかしを次の世代にも示したい、自分たちはこれだけやったということを見せたいのだということで、そういう仕事をしてくれており、ありがたいことだと思っています。人間はその立場になれば何でもやるようになる。皆さんも職員でいろんなところに配置されて、嫌だな、何か県営住宅の金集めてこいと、あるいは突然生活保護の調査に歩けと、嫌だな、こっちの職場。そう思わずに、歩いていくと、その中で人生とはこういうものなのか、人生とは複雑でおもしろいなど、そういうことが目覚めますよ。そのときはぜひ小説を書いてほしい。いい小説を書いたら私に持ってきてほしい。岩手県にも高橋克彦先生とかいろいろいますけれども、書いてほしい。本当にその点では目利きでございますから。

生活創造社会とは、要するに自主自立の県政運営、県政運営の前提になりますのは自主自立の精神でありまして、地方分権、三位一体の改革、あるいは市町村合併などの進展に伴いまして、地方自治のあり方が大きく変わろうとしています。自立する地方の時代がやってくる。青森県も県民の皆様それぞれが自立していただき、自らいろんなことを提案する、自らいろんなことをやる。そして県は「自ら助くる者を助く」と。さまざまな提案する職員、さまざまなことでアイデアを出してきた県民の皆様方、農業者も漁業者も含めていろんな方々を提案型、自主自立で頑張ると、そういう方々とともに我々ネットワーク組んで頑張っていこうと、それ進めていかなければ生活創造社会ができないという話をしています。

従来パンとサーカスの県政から、自らを助くる県政と展開していきたいのであります。パンといえば箱物の政治であり、サーカスといえばイベントの政治でありました。20世紀という時代、21世紀も若干それを引きずりましたけれども、そういったパンとサーカス、箱物やイベント的な何かやっていたらいいのだと、そういう時代ではなく、まさに自主自立、こつこつと基盤からいろんなものをもう一度進めていこうと、21世紀の価値は何なのであろうかと。私は時間というのが一番の価値であり、またともに生きる家族であり、地域社会である、そういうことを思うのですけれども、そういったいわば我々が効率的に生きていく上で豊かさとは何かということをもう一度問い直す、そういう時代が来たと思っています。

ともかく元気、来年以降、テーマをさらに「元気青森人の創造」ということをスローガンに来年は人財分野をもうちょっと、自分で何かしてみよう、チャレンジしてみようと、そういった人財をふやしていこうと思ひまして、予算的にも配分していこうと思っているのです。

ともあれ北東北三県、北海道、まさに公務員の皆さん方、特に県庁職員の皆様方、繰り返し申

し上げます、人財の宝庫であります。皆様方が今どのように岩手県のために行動しようと思うのか、皆様方が今まさに自分自身の人生の中において、天職として選んだ県の公務員という仕事、この仕事の中でどういったことを行おうと思うのか、それが実はそれぞれの地域社会を強めていく、高めていく、そのことにつながるものであると思っております。

ともかくこの世は人と人との絡み合いと昔からあるのですけれども、人と人がつくっていく社会でありますし、その中において人財、人というものが最も大切であると感じる次第でございます。

最後に、竹内副知事、そして岩手県職員の皆様方にあわせて感謝を申し上げまして、北東北三県、そして北海道頑張ろうということを申し上げ、本日のお話とさせていただきます。ありがとうございました。お騒がせしました。

何かご質問をお受けするのですか。

## 質 疑 応 答

### ○司会

若干お時間をちょうだいしております。せっかくの機会でございますので、知事さんに幾つかお尋ねのある方、挙手をしていただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

### ○質問者 A

今、広域生活圏の再編ということで各地域を説明して回っております。久慈や二戸などの岩手県北地域は、青森県の八戸地域と県の区域にこだわらないで連携する必要があると思っておりますが、知事さんのお答えはいかがでしょう。

### ○三村青森県知事

私自身、ずっと町長時代から「小さな政府大きな地方主権」ということを言っているのですが、我々北東北、北海道の場合、それぞれ連携する中でというか、市町村合併がどんどん進んでいるという状況の中において、県の役割も非常に小さくなってきているのだと思います。特に岩手県北と青森県南の部分ですけれども、医療の関係とか学校の関係とか、かなりお互いに行き来している部分が多いわけでございますから、そういった比較的取り組みやすい分野を含めて共同連携、いろんなことがあり得るのかなと思っておりますし、また実際に我々特に北東北三県で連携できることはどんどん連携していこうということなわけでございます。地域の方々の暮らしというのはやっぱり交通体系の中で非常にまとまるわけでございますから、その交通体系にあわせながら、お互いの県は違って、県境というものがあってもやれることを何か工夫するとか、そういうことが重要になると思っております。

実は、私どもも先々のことにはなるのですけれども、県内それなりの道路ネットワークできてきたわけですから、今までのような小分け、岩手県は三つということでしたが、私どもも何らかの方向性で三つなり四つなりという形の区分の中に一つの生活圏、そこに例えば医療の拠点があり、福祉はそれぞれやるなど、そういう形のものをつくり上げていくことで行政コストを下げる、

その仕組みを行おうとしています。境目なしに重なっていく部分は何とか行政的にも話し合うことができると思っております。その方面、竹内さんは青森のこと詳しいですし、振興局長もなさっていますから、いろいろ話ができると思いますので、またご相談させていただきたいと思います。

ともあれ現状、私ども医療の部分、教育の部分で相当いいやりとりがもう行われていると認識していますので、それをさらにもうちょっと何か行政システムの中で取り組める部分があればと、そう感じる次第です。

#### ○質問者A

ありがとうございました。

#### ○司会

あとほかにございませんか。

#### ○質問者B

今の質問で青森県南、それから岩手県北の連携の話が出ました。自分の仕事でないので恐縮なのですが、新幹線ができた反面、並行在来線というのがあります。鹿児島とか熊本では両県で三セクを設立して共同で運営していますが、青森と岩手はそれぞれに三セクを運営しています。そこに至るまでの考え方はそれぞれあったと思うのですが、青森と岩手が県境の枠組みを越えて一緒にやっていけば、コストダウンを図ることができて、両県民のためになると思うのですが、いかがでしょうか。

#### ○三村青森県知事

鉄道部分についてはよく答えられませんが、何かを一緒にできるものがあれば本当にすべきことが多々あると思います。

#### ○竹内副知事

実際、しっかり協議をやった経緯があります。管理区分の総延長の問題等両県で協議した結果、その方がいいだろうということになった次第です。

#### ○三村青森県知事

今後は、立体型の観光の開発とか出てくるわけですから、本当に総合的な観光という直接マネーに結びつくところであればともに乗れる部分が多々あって、そうすると連携観光の中においていろいろまた仕組みができていくと思います、鉄道はともかくとしても。そういう形で大きく北東北三県は連携できる部分あるのだと思います。

私ども来年から新幹線観光というものをテーマにして、新青森開業に向けての全体のシステム、2次交通等を含めてシステムの見直しということを行いますので、その際北東北キャンペーン等連携ができると思います。また、それぞれが持っている公設の研究のコラボレーションしようとか、そういう機運も出てきまして、かなりいろんな部分での連携というのが今後具体化していく

のではないかと大いに期待しています。

以上であります。

#### ○司会

ありがとうございました。非常に岩手県の職員に猛烈なエールを送っていただいたというふう  
に感じております。

本日はご多忙の中、ご講演いただきました三村知事に改めて盛大な拍手で御礼申し上げさせて  
いただきます。本日はどうもありがとうございました。